大坪玲子『嗜好品カートとイエメン社会』法政大学出版局　2017 年　293 頁

「イエメンのカート」と聞いても、ご存知の読者は多くはないであろう。本書は、それを一所懸命に説明し、そこからイエメン社会の特質に迫ろうとした人類学的な労作である。

カートとは、軽度の覚醒作用を伴う嗜好品である。イエメンを主たる生産地、消費地とし、対岸の東アフリカでも用いられる。エチオピア、ケニアでは合法だが、アラブ諸国ではその輸入および使用が禁止されている。イエメンやソマリアからの移民により、欧米諸国にも広がったが、イギリスなどでの合法に対し、北欧諸国などでは禁止と対応は分かれる。

カートと呼ばれる常緑低木があり、その枝先の柔らかい葉を口中にため込み、奥歯で押し出すように噛んで、葉腋のみを摂取する。葉腋にはカチノンとカチンというアンフェタミンに似た成分が含まれ、これが覚醒作用を引き起こす（ちなみに、評者は［松本 2002］でアンフェタミンと誤記してしまった。この場を借りてお詫びしたい）。カートを詰め込んだ片方の頬が異様に膨らみ、口中で器用に葉を循環させながらモグモグしている姿は何となくユーモラスで、イエメンではおなじみの風景である（葉の残骸は最後に吐き出される）。

イエメンでは、昼食後に個々の自宅に知人が集まり、カート・パーティーが開かれる。覚醒作用といっても、濃いコーヒーを何杯か飲んだ程度の軽いものなので、カートは嗜好品としての分析よりも、結衆や社交の媒体という社会的な機能にかかわる考察の対象となる例が多い。しかし、一般に利用可能な資料としては、これまで［佐藤 1993］や［Kennedy 1987］、［Weir 1985］しかなかった。本書は、カートにかかわる邦語で初めての本格的な研究書であるばかりでなく、久しぶりに世に出た待望のカート研究であるといえる。

このことは著者自身が、「イエメンで消費量や生産量が急増したのは一九七〇年代に入ってからであり、その時期に人類学者たちによる調査研究が集中した。しかしその後いくつかの理由でカート研究は途絶えた。本書の第一の目的は、カート研究の止まった針を進めることである。」（p. 2）と記している。そして、カートの生産、流通、消費にかかわる 1970 年代と 2000 年代の比較によって、カートによる人々の結びつきから見たイエメン社会の特徴を描き出すことが、本書の第二の目的となる。本書の目次は、以下の通りである。

序論　イエメン、カート、イスラーム
　第 1 章　カート伝来と消費の拡大
第 I 部　カートを噛む
　第 2 章　カートをめぐるマナー
　第 3 章　消費の変化
第 II 部　嗜好品か薬物か
　第 4 章　薬物としてのカート
　第 5 章　嗜好品としてのカート
第 III 部　カートを作る
　第 6 章　生産者とカート
　第 7 章　コーヒーとカート
第 IV 部　カートを売買する
　第 8 章　流通経路とその効率化
　第 9 章　商人、生産者、購入者の関係
結論　ゆるやかな関係

第 I 部が消費、第 III 部が生産、第 IV 部が流通であり、その間の第 II 部においてカートが嗜好品であるか、薬物であるかについて、その成分や国際機関・各国政府の判断、社会問題・経済問題としてのカートが論じられている。本書の中心であり、最大の特色ともなっているのは「流通」であろう。生産者とカート商

人の間に介在する仲買人（ワキール、ムスリフ、ダミーンと呼ばれる）やカート商人と消費者の顧客関係に関する詳細な調査から、著者は自ら「ゆるやかな関係」と呼ぶイエメン社会の特徴を導き出す（第 9 章および結論）。イエメン社会は、地形や部族などを背景とした保守的で排他的なものと一般には理解されている。確かに血縁地縁関係が強く、人間関係が固定化される場面が他国に比して多いことは否定できない。ところが、本書によれば仲買人とカート商人、カート商人と消費者との関係は流動的で、固定化とは正反対の「浮気性」に支配されているという。カート以外の商品では、スークでの取引形態や一般的な顧客関係にこのような「浮気性」は見られないようなので、カートの取引には他にはない自由さがあるということなのだろう。

もちろん、「消費」と「生産」についても、興味深い記述や指摘が豊富に含まれている。評者個人としては、カートのイエメン伝来から普及までの歴史や、そのイスラーム的な是非にかかわるウラマーの諸判断、さまざまなテーマでのカートとコーヒーの重なりなどが面白かった。「流通」という独自の視点と内容を含みながら、カートにかかわる可能な限りの要素や側面を網羅した、世界的水準からみても一級品の内容を誇る力作であるといえよう。たとえば、著者はイエメンで出版された『イエメン百科事典』（1992）の「カート」の項目を参照しているが、これには本書の参考文献にはない第 2 版（増補版、2003）があり、「カート」の項も 3 ページ分から 29 ページ分に増加している［al-Zalb 2003］。そこでのカートの歴史や用いられ方、経済・社会・文化・国家とのかかわりなどの記述は、本書の該当箇所でもきちんと押さえられ、それらの内容に齟齬も見られず、当然のことながらさらに詳しい解説がなされている。ここからも、著者が広範囲な資料を渉猟し、現地での見聞を含めた十分な知見を有していることが見てとれる。

一方、本書には著者が 2003 年にサナア市で 122 人に対して行なった、カートの消費に関するアンケート調査が用いられている（第 3 章および巻末資料）。カートの長所・短所、どこで誰と噛むか、噛む理由、噛まない理由などが質問項目に並び、貴重な資料であることは疑いない。ただ、その内容をどこまで一般化できるかについては、疑問が残る。おそらく著者もこの点は自覚していて、アンケート結果のみが淡々と整理、解説され、それ以上の一般化はされていない。しかし、読者からすれば、アンケート結果はイエメンのカートを知るための目安となり、その内容を以って暮らしや社会を理解することになる。さらに、2003 年から 2009 年にかけて断続的に著者が各地で実施し、本書において考察や評価に多用されているさまざまなインタビュー調査も同様であり、その内容を一般化する妥当性にどうしても考えが及んでしまう。

もちろん、このような問題は本書に限られるものではない。ある社会の特徴を捉えようとする目的と、個人レベルで可能な情報収集の範囲との間にギャップが存在する研究すべてにあてはまるものであろう。それゆえ、いわば永遠の課題なのかもしれないが、フィールドワークの個別的な成果とそれを一般化した全体への評価を橋渡しするような記述が、本書においてはもう少し必要だったのではないかとの印象を持った。

最後に評者の特権で、カートの味わいについて個人的な経験を書かせてもらう。カートを噛む姿やカート・パーティーは、イエメンにしかない独特の風景で、興味をそそられる。ところが、噛んでみると羊の気持ちがよくわかるくらい不味い（草の味しかしない）。口の中は傷つけるわ、覚醒作用なんて感じないわ、葉っぱを飲み込んでおなかを壊すわで、損した気分しかない。しかし、慣れてくると甘みを覚えるようになり、いくぶん高揚したかのような感覚がある。うまく噛めるようになるには、3 か月ほどかかった。見た目は面白いが、容易には楽しめないというところが、いろいろな意味でイエメンそのものを象徴しているように思える。

＜参照文献＞

佐藤寛 1993 「社交――イエメンの場合」大塚和夫・山内昌之（編）『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社, pp. 169–183.

松本弘 2002 「カート」小杉泰・他（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p. 276.

Kennedy, J.D. 1987. *The Flower of Paradise: The Institutionalized Use of the Drug Qat in North Yemen*. Dordrecht: Reidel Publishing Company.

Weir, S. 1985. *Qat in Yemen: Consumption and Social Change*. London: British Museum Publication Ltd.

al-Zalb, ʻAbd Allāh ʻAlī. 2003. "Qāt," *al-Mawsūʻa al-Yamaniyya* (2nd ed.). Ṣanʻāʼ: Muʼassasat al-ʻAfīf al-Thaqāfiyya. Vol. 3, pp. 2305–2333.

（松本　弘　大東文化大学国際関係学部教授）

長縄宣博『イスラームのロシア――帝国・宗教・公共圏 1905–1917』名古屋大学出版会　2017 年　ix＋326＋101 頁

本書を手に取れば、読者はまず「イスラームのロシア」という主題に一瞬瞠目するのではないだろうか。本書の舞台である 20 世紀初頭のロシア帝国には総人口の約 1 割、すなわち約 2 千万人のロシア・ムスリムが暮らしていた。ウラル山脈はヨーロッパ・ロシアとアジア・ロシアを分ける境界線を成すが、地理的にはそのヨーロッパ部に位置するウラル・ヴォルガ地域において、主としてタタール語で様々な活動を展開したムスリムが本書の主人公である。それは、現在で言えば、領域としてはロシア連邦内のタタールスタン共和国やバシコルトスタン共和国、民族としてはタタール人、バシキール人といったテュルク系の民族に相当する。

著者は、ロシア帝国を「皇帝への忠誠を要石として多様な人間集団を宗教と身分に分類して権利と義務を分配する国家」「多種多様な人間集団の法慣習に沿って国家が権利と義務を分配し、それを国家とのある種の契約とみる個々の臣民が自身の属す集団の法律に基づいて権利を行使する体制」（5 頁）と捉え、ロシア史研究者クルーズ Robert Crews による「宗派国家（confessional state）」、ワース Paul Werth による「多宗派公認体制（multiconfessional establishment）」といった視座を受け入れつつ、「帝政最後の 10 年間にヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会に生じた変容」（7 頁）に焦点を当てる。この「変容」こそ、筆者が名付けたところの、ロシア帝国という宗派国家における「ムスリム公共圏」の出現であり、本書の目的はその出現の意味を問い、ムスリム社会の代弁者たちの多様な「実践や行為が織り成す政治」（10 頁）を具体的な争点に即して描くことと設定されている。本書で扱われるこれらの争点は、1905 年革命（ロシア第一次革命）以降、帝国内で刊行が許されるようになったムスリム定期刊行物において繰り広げられた多様な議論に反映された。

全体の構成としては、序章「帝政ロシアのイスラームと公共圏」で問題の所在と本書の視座、構成、史料と方法が提示され、第 1 章「帝政末期ヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会」では導入として時代背景とロシア・ムスリム地域の概要、その中でのヴォルガ・ウラル地域の特徴が描かれる。第 2 章から第 8 章は 3 部に分けられ、第 I 部＜宗派国家とムスリム社会＞（第 2 章～第 4 章）は宗教行政、第 II 部＜地方自治とムスリム社会＞（第 5 章、第 6 章）は公共空間としての地方自治、第 III 部＜戦争とムスリム社会＞（第 7 章、第 8 章）は戦争をテーマとしている。終章「帝国の遺産とムスリム公共圏の変容」は総括ならびに帝国以後のムスリム公共圏について論じている。

以下、各章を個別に見ていこう。第 2 章「イスラームの家の設計図――「良心の自由」と宗務協議会の改革論」は、帝国内のムスリム管理のために設けられていた宗務協議会制度の改革をめぐる論争をトピックとしている。ロシア第一次革命すなわち 1905 年の十月勅書によって約束された「良心の自由」を「宗教の自由」と解釈することによって、ムスリム共同体はロシアにおける「イスラームの家（ダール・アル＝イスラーム）」の設計図を多様な形で提案し始めた。ここでは、宗務協議会の指導者の資格、宗務協議会の宗教的活動の内実、宗務協議会の帝国内管轄地域という 3 つの争点が扱われる。そして、こうした議論を通じてムスリム社会内部に「競争的な言語空間」（45 頁）としての「ムスリム公共圏」が生まれたことが指摘されるのである。

第 3 章「マハッラの生活――統治制度から社会をつくる」は、金曜モスクを中心に形成され、教区に類する機能を有していたマハッラ（ムスリム共同体の最小単位）の再編を扱っている。章の副題が示すように、ここでは、宗務協議会を経由して行われる行政手続きを「能動的に利用しながら」（80 頁）、マハッラの人々がマハッラの教育活動や財政を自律的な方向へと再編したことが明らかにされる。その過程でムスリム公共圏は各地のムスリムに共通する問題を提示し、離れて暮らす人々の間の議論を喚起したり、「既存の行政手続きとイスラームの用語を接合するための言葉」（80 頁）を提供するなど、マハッラの再編に直接働きかけたという重要な指摘がなされている。